

〈Symposium コロニアリズムとしての教育学 報告論文〉

植民地支配と近代教育

—ある台湾人知識人の足跡—

*Colonial Rule and Modern Education;
The Traces of a Taiwanese Intellectual*

駒込 武 (京都大学)

Takeshi Komagome (University of Kyoto)

本論文では林茂生という台湾人知識人がコロンビア大学に提出した学位論文に即して植民地教育の問題点を浮かび上がらせるとともに、当時の教育研究の中の位置づけを検討した。林の論文の基本的視座は、植民地教育と近代教育をほぼ同一視しながら、総督府の抑制的教育政策を批判するというものだった。しかし、1920年代に文化的同化政策が強化される状況の中でデューイの思想を流用しつつ、近代教育とは「内側から個人を発達させる」ものであるという観点から植民地教育を批判した。その内容はアカデミックな教育研究の世界では黙殺される一方、台南長老教中学という学校を「台湾民衆の教育機関」として組織していく構想も1930年代には圧殺された。そこから浮かび上がってくる問題は、近代教育という理念の両義性であり、教育とは「日本人を日本人にまで陶冶する」(近藤善治)ことであるという発想の暴力性である。

1 はじめに

いわゆる教育思想史研究において意識されている〈世界〉は、あまりにも狭いのではないかと試みに教育思想史学会編『教育思想事典』において見出し項目とされている人名約130名の内で〈西洋人〉〈日本人〉以外の人物を挙げるならば、孔子、孟子、張之洞、蔡元培、陶行知、舒新城の6名に過ぎない¹⁾。偏りは明白である。もっとも教育思想史研究と一口に言っても人により方法論や課題意識は異なることだろうし、ルソー、ペスタロッチなど〈西洋人〉の代表的な教育思想家の議論の中に擁護すべき近代教育の理念を見いだすというスタイルの研究が、今日では批判されていることも知らないわけではない。それにしても、歴史学一般に比すれば教育

史研究の〈世界〉は狭く、教育思想史研究となるとさらに狭隘になっていくのではないかと。〈教育〉に関わる〈思想〉を問題にしようとする〈世界〉が縮小していくのはなぜなのか。〈東洋〉の人々は教育思想史という領域においてなぜ容易に無名化されてしまうのか。さしあたり指摘できることは、〈教育〉や〈思想〉を問うことが規範をめぐる問題を引き寄せること、そして、明治維新以降の日本で〈西洋〉の思想こそが規範の源泉とみなされてきたことである。たとえフーコーなどの理論に依りながら近代批判の観点を打ち出すとしても、〈西洋人〉の思想に規範的なものを見出し、〈日本人〉がそれを学び、〈東洋〉の人々に伝播していくというような、知をめぐる再生産の構造そのものは牢固として変わらないように思われる。

令」と称された)を制定しうる点で立法権も保持していたことを指している。経済面に関しても、「一般的に農民や労働者はほとんど台湾の現地住民から構成されているのに対して、商業や産業に関わるより大規模な事業はほとんど日本人が支配している」(p. 23)と述べている。政治的な諸権利を剥奪された状態で現地住民(natives)が労働に従事し、支配者が政治経済の実権を握るという構図は台湾がまぎれもない「植民地」であることを示していた。

林茂生は、植民地支配の基幹に存在する政治的・経済的不平等に対して批判的観点を保持していた。ただし、教育に関する問題となると、論述のトーンは微妙に異なったものとなる。

台湾における教育の歴史において彼がまず着目しているのは、1898年に台湾総督に就任した児玉源太郎の発言である。児玉は「教育は一日も忽諸に付し去るべからず、然れども漫に文明流を注入し、権利義務の論に走るの風を養成し、新附の人民をして不測の弊害に陥るなからしめんことを期せざるべからず」(p. 37)と述べ、教育の普及が台湾人の政治意識の覚醒につながることを警戒していた⁸。林茂生はこうした方針を抑制的教育政策(negative educational policy)として批判しながら、同時に、責任の一端を台湾人自身の「保守的態度」に求めて次のように記している。

台湾人は彼ら自身の理由によって、日本人が導入した新式文化の価値を認識することができなかった。彼らの保守的態度と古い文化への強い固執が総督府に影響し、抑制的教育政策をとらせるに至った。(p. 38)

中華文明への誇りに固執する人々を「保守的」と批判し、日本人が導入した新式文化(new type of culture)に積極的な意義を見出そうと

していることがわかる。もともと、新式文化は日本文化と必ずしも同義ではない。その新しさの実質は、日本的であることよりも近代的事実に見いだされていたからである。たとえば、彼は、「台南と台北の長老教会宣教師により設立された私立学校は、日本人の到来に先立って近代教育を導入する側面を持っていた」(p. 66)と述べており、宣教師も日本人も同様に「近代教育」の導入者として捉えている。この場合の「近代教育」が具体的に何を意味しているのかということは必ずしも明確ではないが、たとえば台南長老教中学のカリキュラムとして掲げられた内容、「歴史、地理、数学、天文、聖書」(p. 27)が西洋近代文明への門戸を開くものとして意識されていたと推定できる。

学位論文におけるこうした叙述には、林茂生の少年時代の経験が反映していると思われる。決定的な意味を持ったのは、父親のキリスト教への改宗であろう。キリスト教への改宗は、信仰の問題であるばかりでなく、多くの場合、中華文明から西洋近代文明への「改宗」という世界観の転換をも意味していた。林燕臣が洗礼を受けた1898年には、林茂生は11歳で日本の仏教教団の創設した日本語学校に入学、修了後は日本語の能力を生かして郵便局の給仕となった。まだ抗日ゲリラの活動が台湾各地で展開されていた時期のことであり、林燕臣・茂生親子の行動は「親日」的と評されてもおかしくはない。しかし、彼らの意図に即するならば、「親日」か「反日」ということよりも、西洋近代文明という新式文化の優越性を認識するか否かということこそが重要な意味を持っていたと考えられる。

他方、台湾総督府の首脳は、英国人宣教師の視線を強く意識しながら、大英帝国同様、自らが「文明化の使命」の担い手であることを必死にアピールしようとしていた。特に児玉総督の下で民政長官に就任した後藤新平は、植民政策

の成否が外交政策に及ぼす影響を考慮し、インフラの整備を進める一方、キリスト教を保護する姿勢を示した。たとえ一時的なものであったとしても、そこに日本人と台湾人キリスト教徒と英国人宣教師の協力関係が成立する余地があった。学位論文において林茂生が新式文化の意義を認識しない人々を「保守的」と評価していること背景には、こうした歴史的状況が存在していると思われる。

2-2. 1910年代

1900年前後の台湾において、林燕臣・林茂生親子のような存在は少数派だったと思われる。しかし、1910年代になると状況は変化した。林茂生は、日露戦争における日本の勝利と産業発展の事実が台湾人の変化を呼び起こしたとして、「第一に日本人が永続的にこの島にとどまるであろうという事実を受け入れるようになり、第二に日本の文化や教育の価値を認めるようになった」(p. 40)と説明している。

歴史の中に生きる者にとって日本人が半世紀にわたって台湾の統治者として存在し続けることは必ずしも自明のことではなかった。日本人が永続的に存在し続けるという受け容れがたい事実を受け容れることが、日本の文化や教育の価値が認識される前提であった。台湾人の心境の変化を示す根拠として林茂生が挙げているのは、台湾人のための初等教育機関である「公学校」への就学者の増大と、日本内地への留学者の増大という事実である。同時に、彼は、台湾人の中で近代教育への要求が高まるにつれて、総督府の抑制的教育政策への不満もまた高まっていった事実注意到を促している。焦点となったのは、中等教育をめぐる問題だった。

総督府は、日本人に対しては日本内地の教育制度に準拠した中学校、高等女学校を設け、大学・専門学校への進学の際となる中等学校を

整備した。しかし、台湾人向けの教育機関としては、教員養成を目的とする国語学校と医学校のほか、幾つかの実業教育施設を設置するにとどまった。そのため1910年代になると、台湾社会の地域エリートは、台湾人向けの中学校を設立する運動を起こした。その中には、占領当初は「新式文化」に対して懐疑的だった人々も数多く含まれていた。当時、総督府は、山間部に居住する台湾先住少数民族の抵抗や辛亥革命の波及という「内憂外患」に悩まされていたために漢民族エリートの協力を不可欠としていた。そこでこの要求に譲歩して、1913年に台中に公立の中学校を設置する方針を定めた。

林茂生は1908年から16年まで日本内地に留学していたので、以上の経緯を自らの経験に即して知っていたとは考えられない。ただし、この問題への関心の大きさを示すように、事実の経緯を詳細に記している。すなわち、中学校設立のために台湾人エリートが多額の寄附をしたこと、しかし、総督府による公立中学校設立決定から実際の設立までに2年間もの歳月を要したこと、そして、実際に設立された台中中学校は修業年限が日本内地の中学校よりも1年短いなど教育水準において明らかに劣るものとされたことを指摘している(pp. 58-60)。

実は、ニューヨークで学位論文を書く以前から、林茂生は台中中学校設立運動に着目していた。1926年には長老教中学の校友会雑誌に寄せた文章で、教育事業のために民間の有志が自主的に基金を集めた例としては、台中中学校の設立運動と、長老教中学の寄付金募集事業の二つの例が存在するだけだと記している⁹。当時、長老教中学は私立各種学校という周縁的な位置づけにあり、総督府は正規の私立中学校として認定する条件として莫大な寄附金を集めることを要求していた。林茂生は後援会を結成して必要な寄附金を集めるのに奔走し、1000人近い台湾

人の賛同者を得た。1928年には、後援会が長老教中学を「台湾民衆の教育機関」としていくのだという宣言書を発表した¹⁰。しかし、台南長老教中学は依然として私立各種学校のままであった。台中中学校が公立として総督府の厳しい管理統制下に置かれたのとは対照的な形ではあるが、教育における台湾人のイニシアティブが阻害されている状況に変わりはなかった。

台湾総督府は「文明化の使命」の担い手たることを標榜しながらも、実際には積極的に教育を普及しようとはしなかった。台中中学校設立をめぐる経緯は、1910年代当時の台湾人エリートの認識においても、林茂生の歴史認識においても、総督府の抑制的教育政策への批判を明確に意識化するターニング・ポイントになったと考えられる。

2-3. 1920年代

台湾人エリート層の強い教育要求に直面した台湾総督府は、1919年に第一次台湾教育令を公布し、台湾人向けの教育制度を初めて体系化した。3年後の1922年には、第二次台湾教育令を公布し、それまで別系統だった台湾人向けの教育制度と内地人向けの教育制度を部分的に統合した。すなわち、初等教育レベルでは「国語ヲ常用スル者」は小学校、「国語ヲ常用シナイ者」は公学校として、一部の台湾人に小学校入学への道を開いた。中等教育以上では日本人と台湾人の共学を原則として、1928年には台北帝国大学も設置した。この改革により、総督府はそれまでの抑制的教育政策を大幅に修正したとひとまずは言うことができる。

林茂生は、この改革をどのように評価していたのだろうか。抑制的教育政策が修正されたことを単純に歓迎していたのだろうか。そうではない。まず彼は、「台湾人との国民意識の覚醒」(p. 73)があったからこそ総督府は改革を

せざるをえなかったことを強調している。第一次世界大戦以後、日本や中国大陸や欧米への留学生たちが「新しい民主主義的な精神」を身につけて帰ってきたことに注目しながら、「彼らは自由であり、率直であり、批判精神に満ちていた」(p. 74)と述べている。もちろん、この「彼ら」の中には自分自身も含まれていることだろう。

第二次台湾教育令下でこの新しい知識人たちが直面した問題は、学校が文化的同化のための装置としての性格を強めたことだった。林茂生は「台湾人の中でリベラルな態度が成長するのにもなって総督府は統制を強め、より厳格な同化を実施することになった」(p. 93)と記している。もとよりこの場合の「同化」とは政治的経済的な諸権利の平等を意味するものではない。もっぱら文化面において「台湾人を日本人の行動様式に成型」(p. 93)し、異民族としての他者性を抹消することを意味していた。林茂生は、中等学校で台湾人の文化に対して一切の考慮が払われないことを指摘しながら、自らの言語や文化の喪失が「外側から強いられた時に、人格の崩壊や人間の存在基盤そのものの喪失につながりかねない」(p. 123)と強い懸念を表明している。また、共学とはいっても主に日本人を収容する中学校と主に台湾人を収容する中学校という区別があることに注意を促し、日本人中心の学校では定員の10%に限って台湾人の入学を認めるという不文律(unwritten law)があることを民族差別(racial discrimination)と批判している。たとえ政策の基調が文化的同化政策へと変わったとしても、その根幹に民族差別が存在していることに変わりはなかった。ではどのような見地からこれを批判するのか。

これまで述べてきたように、林茂生の論文の基本的視座は、近代の魅力に溢れる新式文化を日本文化とほとんど同一視しながら、総督府の

抑制的教育政策を批判するというものだった。日本による占領以前から存在していた書房のような伝統的教育機関を必ずしも否定的に評価しているわけではないものの、台湾人自身の文化の意義に関する考察は乏しい。しかし、現実には文化的同化政策が「人間の存在基盤そのものの喪失」をもたらしかねない状況をつくり出している。それを批判するためには、そもそも近代教育とは何かということに関する理論的視座を再構築することが必要になっていた。こうした課題に対する回答として導き出されたのが次のような文章である。

近代教育は子どもの創造的な力を台無しにしてはならないという考えの下に、外側から強制するのではなく、内側から個々人を発達させることを目的としている。同化とは、望まれもしない外側から自分の基準を押しつけようとするものである。(p. 125)

林茂生は、この文章において文化的同化政策としての植民地教育を近代教育と区別するばかりでなく、原理的に対立するものとして捉えている。他方、台湾人自身の文化は、個人を「内側から発達させる」という原理にしたがって尊重すべき根拠を明らかにしている。ここで注目すべきことは、次の四点である。

第一に、植民地教育を近代教育とほぼ同一視する立場からの転回として、こうした視点を見出したことである。彼は、あらかじめ定められた視点から論文を書くというよりも、自分自身の経験を思い起こしながら、それぞれの時代状況の中での問題点を浮き彫りにする中で、こうした理論的視座にたどり着いたと思われる。はじめにも述べたように、それは「内部観測」としての歴史叙述であった。

第二に、同化政策を批判する根拠が、台湾人

の文化それ自体の重要性というよりも、子どもの創造力やパーソナリティを損なう危険に求められている点である。彼は、台湾の文化を保全するために子どもの創造力を尊重すべきだと述べているわけではない。子どもの創造力を否定してはならないから、台湾人の文化を尊重すべきだと述べているのである。換言すれば、台湾人自身の文化として提示されたものであっても「内側から個々人を発達させる」という原理に抵触するならば、批判の対象となる可能性を持っている。その主張は、帝国主義に抵抗するナショナリズムの表現であると同時に、ナショナリズムそれ自体をも相対化するヒューマンズムに対して開かれたものとなっている。

第三に、林茂生が自らの視座を深めるに際して、デューイの思想を援用していることである。たとえば、先の引用に続く段落において「教育とは成長である」という言葉に始まるデューイの文章を引用しながら、「同化の原理はこの公理に抵触する」(p. 125)と述べている。もちろん、論文で引用されているのは、デューイだけではない。キリスト教的ヒューマンズムに基づいて同化政策を批判した矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」(1928年に『国家学会雑誌』に連載、1929年に単行本化)など多くの同時代の思想を参照している。その中でも重要な役割を果たしているのがデューイの思想である。しかも、植民地における同化政策批判という文脈の中にデューイの思想を置くことによって、——おそらくデューイ自身の意図を越えて——帝国主義的な世界秩序におけるその思想的意義を見出している点が重要である。

第四に、林茂生のたどり着いた視座が、長老教中学における彼自身の実践と緊密に結び付いていたことである。彼は、現状に対する「暫定的解決策」として公学校で台湾語を補助的な教授用語として採用すべきことを説くとともに、

中等教育に関しては「ひとつの制度、異なる学校」という構想を提示し、大都市に台湾人向けの中高等学校と日本人向けの中高等学校を別に設立し、民族間の別学を原則とすべきと述べている。長老教中学は正式の中高等学校として認定されていなかったものの、台湾人の生徒だけを対象とした学校であり、一般の公立中高等学校には存在しない「台湾語」という教科目を設けてもいた。彼の論文は、こうした独自の教育方針の意義を再確認しながら、さらにそれを教育制度一般の改革へとつなげていく方向性を指し示すものだった。

林茂生は、英国人宣教師の設立した長老教中学との関わり、さらにニューヨークでの留学体験を経て、日本による植民地教育とは異なる、オルタナティブな近代教育の可能性を求めていたと評することもできる。その媒介項となったのは〈西洋〉との接触である。しかし、いうまでもなく〈西洋〉の諸国家も帝国主義国家であり、彼の論文に示された展望を実現していくには大きな困難が横たわっていた。

3 植民地支配と教育研究

林茂生の学位論文は、アカデミックな教育研究の内部においてどのような反響に出会ったのだろうか。出版にはいたらなかったこともあって、現在のところでは、直接的な反響を見出すことはできない。息子林宗義の回想によれば、「この論文は日本統治時期には出版できなかった。その原因は、植民地政府の教育政策に対して厳しい批判を提起していたからである」とされている¹¹。林の引用している矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』が1930年1月に台湾島内で発禁とされたことを考えても、政治的状況ゆえに出版できなかった可能性は大きい。ただし、林茂生の論文への反響を考察するための間接的な

手がかりとなる論文はある。それは、コロンビア大学教授キャンデル (I. L. Kandel) の編集する『教育年報』(1931年版)に掲載された阿部重孝「台湾と朝鮮における教育」である。林茂生の論文の2年後に書かれたこの論文を彼が読んでいたかどうかはわからない。しかし、以下に述べる通り、林茂生は阿部重孝やキャンデルと共通の知的アリーナに属しており、阿部の論文と対照させることにより、帝国主義世界における知のヒエラルヒーの中で林茂生の論文の位置づけを浮かび上がらせることができると考えられる。

キャンデルは、1923年にコロンビア大学教育学部に国際研究所が設けられた際に研究員に就任、1924年に『教育年報』が創刊されると、その編集にあたった。国際研究所は、ロックフェラー財団の寄附金によりモンローを所長として設立された¹²。その活動について注目されることは、アメリカ合衆国による植民地支配下のフィリピンやプエルトリコの教育調査を行っていることである。林茂生は論文の序言で「著者は、モンロー教授、キャンデル教授、ウィルソン教授に対して、この作品を準備する過程で貴重な示唆と友好的な関心を寄せてくれたことに深い感謝を捧げたい」(p. iv)と記している。おそらくキャンデルは指導教官の一人として彼の論文作成に関わっていたと考えられる。

阿部重孝は、1913年に東京帝国大学文科大学を卒業した。林茂生の卒業の3年前であり、どちらも哲学科出身であることを考えれば、両者は面識があった可能性もある。阿部は、1922年に東京帝国大学文学部の助教授となり、翌年、アメリカ合衆国などに留学した。ドイツの哲学的教育学の影響を受けた研究が支配的な当時の日本において、いち早くアメリカ流の経験的な研究手法を取り入れ、教育科学を樹立する必要を説いた人物として知られている。

阿部は、1925年から26年にかけて東京帝国大学の命を受けて台湾における教育調査を実施した。林茂生は学位論文でこの調査に言及し、「1926年に東京帝国大学の阿部教授が主要な学校で知能テストを行うために台湾に来た。しかし、著者の知る限り、その結果はまだ公表されていない」(p. 137)と記している。この文章は、台湾人の知能が日本人よりも劣るという客観的証拠はないという文脈で書かれている。阿部がどのような知能テストをして、いかなる評価を下したのかは明らかではないが、林茂生にとってはこの調査それ自体が脅威と受けとめられていたと考えられる。万一、台湾人が知能において劣るという結果が出るならば、総督府の差別的な教育政策に〈科学的〉な根拠を与えるものとなるからである。

「台湾と朝鮮における教育」と題する阿部の論文は、植民地教育に関する特集を組んだ『教育年報』に掲載された。この論文で、彼は、欧米列強にとっての植民地の地位と日本にとっての台湾・朝鮮の地位の違いを強調し、台湾・朝鮮の教育は「本国の教育制度の延長であり、日本内地で一般化しているのと同じ理想を実現することを期待されている」と述べている。このように原則的な共通性をまず強調した上で、次のように記している¹³。

台湾・朝鮮において微妙な違いも存在している。その言語、風俗、習慣は異なっており、一般に文化のレベルが本国の日本人に比べてはるかに劣っているからである。だが、帝国のこうした地域において教育が何らかの差別意識に基づいて行われていると考えてはならない。彼らに対する教育の究極的目的地は、新附の民に教養を与え、彼らの政治的地位と同様、社会的経済的地位を日本人と同じ水準に引き上げ、「ギブ・アンド・テイク」の原則を

実現することだからである。

阿部は、植民地教育は「差別意識」に基づいたものではなく、文化程度の高い日本人が文化程度の低い台湾人や朝鮮人を「引き上げる」ために教育をしているのだと述べているわけである。これは、植民地支配を正当化するための使い古されたレトリックだった。植民地の支配者を〈おとな〉とし、被支配者を〈子ども〉とみなすことで差別的な対応を正当化する言説は、日本の例に限らずしばしば見られるものだからである¹⁴。それでも、林茂生の論文における1900年前後の状況、すなわち一部の台湾人が日本文化を近代文化とほとんど同一視しながら「新式文化」として受容していた時期には、こうしたレトリックもある程度は通用したかもしれない。しかし、総督府による文化的な同化政策への台湾人の怒りが高まっていた時期において、阿部のレトリックは明らかに時代遅れのものだった。今日でも日本の教育学研究の世界では、阿部は、アメリカの教育学から教育の機会均等という理念を学び、教育における平等を推進した人物として知られている¹⁵。しかし、この論文では教育の機会均等という理念の及ぶ範囲は日本人だけに限定されている。さらに、文化を媒介として再生産される実質的不平等には思考が及んでいない。教育における平等に関する阿部の思考に大きな限界があったことは否めない。

林茂生の論文の辛辣な表現を用いるならば、阿部の論文は、まさに「プロパガンダ」であった。それでは、なぜキャンデルは、自らの編集した『教育年報』にこうした「プロパガンダ」を掲載したのか？林茂生の学位論文の執筆過程で助言を与えた経験に照らして、阿部の論文の内容に疑問を感じなかったのだろうか？この問いに答えることは難しい。キャンデルが『教育年報』の編集作業に具体的にどのように関与し

- 10 「台南長老教中学將為民衆之教育機關」『台湾民報』第236号（1928年11月25日）。
- 11 林宗義「殉道者雖亡、其影響力卻將起始」前掲『日本統治下台湾の学校教育』21頁。
- 12 小林哲也「比較教育学の成立と発展（一）」『ICU教育研究』V号、1958年。
- 13 Shigetaka Abe, "Education in Formosa and Korea", in I. L. Kandel ed., *Educational Yearbook of the International Institute of Teachers College, Columbia University*, (New York, 1932), p. 681.
- 14 大内裕和「教育における戦前・戦時・戦後——阿部重孝の思想と行動——」山之内靖他編『総力戦と現代化』（柏書房、1995年）219頁。
- 15 東田雅博『大英帝国のアジア・イメージ』（ミネルヴァ書房、1996年）を参照。
- 16 I. L. Kandel, "The Education of Indigenous Peoples", in I. L. Kandel ed., *Educational Yearbook of the International Institute of Teachers College, Columbia University*, (New York, 1932) p. xii.
- 17 前掲李筱峯『林茂生・陳忻和他們的時代』109頁。
- 18 近藤壽治『人間学と国民教育』（寶文館、1934年）5頁。なお、近藤の教育学構想を彼のポジションと関連させながら考察するという課題に関しては他日を期したい。
- 19 Shoki Coe, *Recollections and Reflections*, (New York, 1993) p. 83.
- 20 「台南公会堂の二集会」『台湾民報』第300号（1930年2月15日）。
- 21 詳しくは、拙稿「台南長老教中学神社参拝問題——踏絵的な権力の様式——」（『思想』第915号、2000年）を参照。
- 22 「神社参拝問題の中心」『台湾経世新報』第1179号（1934年3月4日）。
- 23 Shoki Coe, *ibid.*, pp. 66-69.

巻頭言

田中智志

フォーラム1 人間形成における垂直軸の問題

- 報告:「無の思想」と子ども——「無の思想」を「教育の問い」の前に連れ出す試み 西平 直
司会:発達論的図式から構造論的図式へ——報告で残された課題について 田中每実
コメント:「非有」という視座 岡部美香
コメント:人間形成における「垂直軸」の構造——新たな発達論とカオスの開かれた検証法として 衛藤吉則

フォーラム2 17世紀の教育思想

- 報告:17世紀の教育思想——その再解釈のためのいくつかのアプローチ 相馬伸一
司会:学習概念の変容:コメニウス以前以後 森田伸子
コメント:経験論と合理論は「結合」するか——合理論的学習論の可能性 宮寺晃夫
コメント:17世紀教育思想の地下水脈 菱刈晃夫

シンポジウム コロニアリズムとしての教育学

- 報告:植民地支配と近代教育——ある台湾人知識人の足跡 駒込 武
報告:人種主義と異文化否定の間に立つ教育学——澤柳政太郎の教育学について 藤川信夫
報告:近代教育思想における「文明」と「野蛮」 安川哲夫
司会:コロニアリズムの視座は近代教育学の学的体質をどこまで問えるか 原 聡介
コメント:コロニアリズムと教育学 片桐芳雄
コメント:神話と啓蒙の間で 今井康雄

コロキウム

- 1 フーコー講義録(1975-1976年)を読み解く
——『異常者たち』と『社会は防衛しなければならない』をめぐって
加藤守通・原田寿江子・室井麗子
2 内部観測アプローチの可能性——ルーマン、シュタイナー、マラグッツィ
鳥光美緒子・今井重孝
3 ジルーの批判的教育学——その意義と問題点をめぐって 上地完治・小林大祐・澤田 稔
4 「記憶の場」に関して視覚文化論と教育学を接合する試み
——あるいは、ファシズム/ホロコーストを伝える空間と芸術 山名 淳・香川 檀

投稿論文

- 〈現実〉から〈幻想〉へ/精神分析から PTSD へ
——S・フロイト〈誘惑理論の放棄〉読解史の批判的検討 下司 晶
田中寛一の職業指導論——職問期における人材配分と職業指導 江口 潔
人間形成における時間的連続性に関する一考察
——時間意識をめぐるアドルノの思想を手がかりとして 白銀夏樹

書 評

近代教育フォーラム

MODERNITY

EDUCATION

POSTCOLONIALISM · SPIRITUALITY · RATIONALITY

教育思想史学会